

CONTENTS

- シリーズ この人に聞く 第27回
2-3 高校生 世界の課題に向き合う
—自ら調べ、考え、伝えたいくなる学びを

- ボランティアのおしごと
4 第3回 ホームページグループ
リニューアル公開秘話?!

- ユニセフを考える1冊
6 ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』

- 第44回 ユニセフハンド・イン・ハンド募金
8 テーマ「最も厳しい状況にある子どもたちの願いをかなえよう～
生きたい! 食べたい! 学びたい!」



北ダルフールの国内避難民キャンプにある栄養ケア施設で、すぐに食べられる栄養治療食（RUTF）を口にする子ども。2003年から続く紛争もようやく平和の機運。スーダン 2022年8月2日撮影。©UNICEF/UN0686672/Abdalrasol

高校生 世界の課題に向き合う

——自ら調べ、考え、伝えたい学びを

ユニセフシアター第2回上映会が11月3日、大阪市中央区のピースおおさかで開かれた。作品は、アフリカ・スーダン難民がテーマの『グッド・ライ〜いちばん優しい嘘』。1983年に始まったスーダン内戦から逃れ、米国に渡った「ロストボーイズ」の実話をもとにしている。上映会では、「映画から何を学んだか」をテーマに、専修学校クラーク高等学院大阪梅田校(大阪市北区)と大阪暁光高等学校(河内長野市)の生徒らが研究発表を行った。ここに紹介する。(河合洋成)

<専修学校クラーク高等学院大阪梅田校> ロストボーイズの男性にインタビュー

「戦争で簡単に人命が奪われている」

米国に渡った後、現在はオーストラリアに住むロストボーイズの1人、ジェームズ・アドルさんの語った言葉を伝えたのは、同校インターナショナルコースの生徒たち。リモートでインタビューし、「私たちに何ができるのか」を考えたという。

ケニアの難民キャンプから再定住プロジェクトで2000年、米国に渡ったロストボーイズは約3,800人。2006年には全米38市に生活するまでになったが、彼らが幸せをつかんだわけではない。孤立や差別、トラウマ、別れといった「苦悩」に直面し、ストレス障害を起こすケースもあると強調した。

ロストガールズの実在

89人。発表のなかで、強調したのがこの数字。米国に行くことができたロストガールズの人数だった。現地では「男尊女卑」「一夫多妻」が文化的背景にあり、女性は「性的暴力」「人身売買」「家事強制」という差別にさらされ、難民社会も例外ではなかった。

表向きは養子ながら、里親家族から虐待など不当な扱いを受けていたという。再定住プログラムは、内戦で両親や家族を失った「孤児」が対象だったため、こうした女性たちは「家族がいる」とみなされ、救いの手は伸びなかったと厳しい現

実を指摘した。

難民問題にどう向き合うか

ロシアのウクライナ侵攻もあり、世界の難民は今年、1億人を突破するとされるなか、一人ひとりは何ができるのか。①難民支援にかかわる、②難民支援活動にボランティア参加する、③難民を支援する団体に寄付や募金をする。生徒たちは3点を提言するとともに、「事実やデータをもとに情報リテラシーを高め、主観に囚われるのではなく、正しく世界を見る習慣を身につけること」が大切な視点だと強調した。

<大阪暁光高等学校>

「中国残留孤児」に注目

「日本人も難民だった」として中国残留孤児問題を取り上げた。

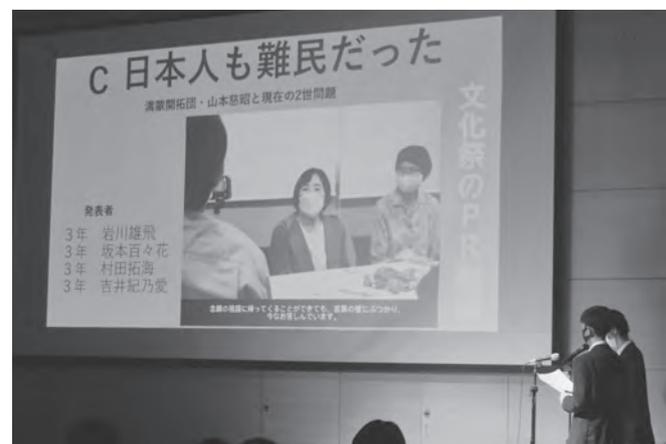
「満蒙開拓団」が組織された長野県阿智村で夏休みを利用し、生徒たちがフィールドワークを行い、孤児2世にインタビュー。さらに、中国残留孤児国家賠償請求訴訟に勝訴した孤児1世にも実体験を聞いた。

「中国では『日本鬼子』、日本に帰ってからは『中国人』と呼ばれ、差別されてきた」

厳しい生活に直面する中国残留孤児や家族らの現状を知るなか、生徒らは「帰国者を待っていたのは何だったのか」と問題を提起。現在、約2万8,000人いるとされる残留孤児2



クラーク高大阪梅田校の発表



大阪暁光高等学校の発表

世の苦難にも目を向け、人権を重視した「心のこもった政策」が必要とし、「戦闘が終わっても戦争は終わらない」と訴えた。

少年兵を忘れないで

難民問題で見えてくる少年兵についても調査した。世界には25万人以上いるとみられ、南スーダンをはじめ、政情不安で最貧地域のアフリカ諸国を中心に集中していると報告。実際に少年兵だった男性の生々しい証言ビデオを放映するとともに、少年兵が絶えない理由の一つに子どもでも扱える小型兵器の開発競争を挙げた。

ユニセフなどの取り組みで、2007年からの10年間に約6

万5,000人が解放されたが、トラウマを抱え、長期的なケアがなければ再び兵士に戻ってしまう危険性も指摘した。

難民問題を考える

難民はシリア、ベネズエラ、アフガニスタン、南スーダン、ミャンマーの5カ国に主に発生し、「先進国ではなく、周辺国で7割以上を受け入れている」と説明。また、国内避難民も約5,000万人を数えると話した。

なぜ助けるのか。生徒たちは「人の命や権利を守るのは普通のこと」と語り、難民受け入れに厳しい日本の入管政策に言及した。

指導のポイント1



ジェームズ・チャン 教諭

(専修学校クラーク高等学院大阪梅田校)

1978年7月、オーストラリア・パース近郊出身。中国、日本で英語教育に携わる。クラーク校には8年間勤務。大学で学んだ日本語をはじめ、中国語やインドネシア語など6カ国語を操る。

Q 今回の研究発表で、生徒たちにはどのようなアドバイスをしましたか？

A 「答え」を提示するのではなく、生徒自身が自ら学ぶよう指導した。調査、研究する過程で、彼らが発見したことを効果的に工夫し、自ら学習スキルを開発できるようなサポートを心がけた。

Q ご自身は、難民問題に関心があった？

A 実はあまり知らなかった。私も生徒たちに負けたくないよう調べ、彼らの疑問に答えられるようにした。そうして互いに切磋琢磨するなかで、ロストガールズの存在に気づき、ロストボーイズの男性と接点を持つことができたのは素晴らしい成果。

Q 若い世代に伝えたいことは？

A 生徒たちにもそうだが、「間違えてもいい。だけどその記憶を消してはいけない」ということ。間違ったところを見て覚えて、二度と同じ間違いをしないよう、線を引くことが大切。消しゴムは大敵です。そして、「不可能なことはない」「夢の実現には時間と努力が必要なることを発見してほしい」と言いたい。

指導のポイント2



多賀健介 教諭

(大阪暁光高等学校)

1992年、大阪府出身。2019年4月から大阪暁光高校に勤務。数学担当。「生徒とともに学ぶ教員」であることを心掛け、学校が希望を持てる場所になるよう生徒会やクラス活動に力を入れている。

Q 「満蒙開拓団」を取り上げたのは？

A 「現代社会」の授業で戦後補償問題を学ぶなか、近現代史に関心を持つ生徒が増えてきた。ウクライナへのロシアの侵攻などで平和が脅かされている実感もあり、歴史から戦争と権力の本質を学ぶことは意味があると、生徒に問いかけてテーマに選んだ。「中国残留孤児の父」と呼ばれ、帰国運動に努めた山本慈昭さんの著書『望郷の鐘』から学習を始め、生地の長野県阿智村を訪ねた。

Q どういうアプローチをしましたか？

A 歴史や社会問題が自分には関係ない、遠いものではないということを考えてほしいと、生徒には自身の生活体験をもとにした感想を書いてもらい、読み上げて意見を出し合うことで学びを深めた。

Q 生徒たちにどうアドバイスしましたか？

A 粘り強く活動を続け、国や社会を動かした人たちについて学ぶことで、希望を感じさせたい。生徒が「伝えたい、語りしたい」と思えるような学びに努めた。



両校集合写真